川合玉堂（ぎょくどう） 1873－1957
Gyokudo Kawai

近代日本画の巨匠・川合玉堂は、明治6年（1873）に葉栗郡外割田村（現在の一宮市木曽川町外割田）の現在玉堂記念木曽川図書館が建つ場所で産声（うぶごえ）を上げ、8歳の時に岐阜へ移ったのち、18歳で京都、23歳で東京に転居し、太平洋戦争の際に疎開（そかい）した多摩川上流の東京都西多摩郡三田村御嶽（現在の青梅市御岳）が終（つい）の住まいとなった。

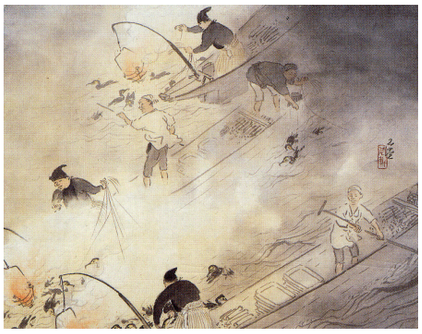
17歳の時の第3回内国勧業博覧会をはじめ、展覧会で多くの賞を受賞し、若くして審査員を務めるなど、日本画壇を代表する画家となった玉堂は、日本の自然を詩情豊かに描いて数多くの名作を遺（のこ）した。そして、偉大な画家として尊敬されるとともに、その温かい人柄によって、今もなお多くの人々に愛され親しまれている。

㉘川合玉堂生誕の碑
Birthplace of Gyokudo Kawai
（木曽川町外割田）

川合玉堂関係略年譜

明治６年（1873）	愛知県葉栗郡外割田村（現在の一宮市木曽川町外割田）に、父川合勘七、母かなの長男として生まれる。本名芳三郎。
明治14年（1881）	一家で岐阜米屋町に移住、岐阜尋常高等小学校に転校。
明治20年（1887）	青木泉橋の紹介で京都の望月玉泉に入門、「玉舟」の号をもらう。年間に数回、岐阜と京都を往復する。この頃から盛んに俳句をつくる。
明治23年（1890）	第三回内国勧業博覧会出品にあたり、「玉堂」と改める。
明治29年（1896）	東京の橋本雅邦を訪ねて入門を乞う。
明治31年（1898）	岡倉天心・橋本雅邦・横山大観ら日本美術院を創立。師雅邦に従ってこれに加わる。
昭和15年（1940）	紀元二千六百年式典当日、文化勲章を受章する。
昭和19年（1944）	東京都西多摩郡三田村御嶽（現青梅市御岳）に疎開する。
昭和31年（1956）	アメリカの雑誌「ホリデー」主催による世界美術展に日本を代表して作品《鵜飼》を出品。
昭和32年（1957）	心臓喘息症をおこし自宅療養。一時快方に向かうが、6月上旬病状が悪化し、30日逝去。同日、勲一等旭日大綬章を受ける。
昭和36年（1961）	青梅市御岳の多摩川の渓流沿いに玉堂美術館開館。
昭和38年（1963）	木曽川町外割田（現一宮市）に、郷土の有志らにより、玉堂生誕地碑が建立される。
平成13年（2001）	生誕地に木曽川町立図書館が建設され、玉堂記念展示室が設置される。
平成17年（2005）	一宮市・尾西市・木曽川町が合併。図書館は、一宮市立玉堂記念木曽川図書館と改称。

《五月雨》昭和24年



《鵜飼》昭和29年

㉙井口唯志（ただし）の碑
Monument of Tadashi Iguchi

貧しく寂しく苦しき中にも志をまげず、28年の生涯を終えた井口唯志の碑。彼が感性豊かな少年期を過ごしたこの地に立つ。

大正から昭和にかけて執筆発表した「幻の十字架」「白蛾」等の小説・随筆はたぐい稀にみる才能に溢れ、その文蹟は今も生き続けている。（浅井町大日比野）

ヴェロンにて

三岸節子 1905－1999
Setsuko Migishi

華やかな花の絵や詩情あふれるヨーロッパ風景などで人々を魅了し続け、女性洋画家の先駆者として知られる三岸節子は明治38年(1905)中島郡起町(現在の一宮市起)で生まれた。油絵を勉強するために16歳で上京、洋画家の岡田三郎助に師事し、女子美術学校を主席で卒業、在学中に出会った若き画家・三岸好太郎と19歳で結婚した。その後、29歳の若さで未亡人となったが、絵筆を折るどころか、画家としての道を貫き、画壇では次第に実力と努力が認められ地位を確立していった。画家として注目を集めながら女流画家協会などの設立に加わるなど、画業と女性画壇の地位向上に努めた功績から、1989年度朝日賞を受賞した。また日本人の女性洋画家として初めてアメリカのワシントン女性芸術美術館で展覧会が開催され、世界にもその名を知られている。

㉚三岸節子記念美術館
Memorial Art Museum of Setsuko Migishi

三岸画伯の生涯にわたる作品を収集・展示している。毛織物工場をモチーフとした建物、画伯が好んで描いたヴェネチアをイメージした水路や現存する土蔵を活かし、愛用の品々を展示するなど、在りし日の画伯を偲(しの)ぶことのできる美術館である。 (小信中島)

佐藤一英 1899－1979
Ichiei Sato

風土の香りと浪漫(ろまん)的宗教観を漂わせて「神秘的象徴主義」と評される独自の詩風を生んだ詩人・佐藤一英は明治32年(1899)中島郡萩原町(現在の一宮市萩原町)で生まれた。大正7年(1918)に早稲田大学に入学し、同級の吉田一穂、中山義秀、横光利一等を集めて詩の研究会を開き、詩と絵による回覧雑誌「朗朗」を発行した。大正11年(1922)には第一詩集「晴天」を発表して萩原朔太郎に認められ中央詩壇に新進詩人として登場し、日本史における韻律(いんりつ)の探求と実践に努めた。また、郷土をこよなく愛した一英は萩原町の萬葉公園内の「樫の木文化資料館」の建設に深く関わるとともに、ふるさとの子どもたちにたくさんの校歌や童謡などを残した。

萬葉公園内の歌碑

㉛人麿塚(ひとまろづか)
Hitomaro-zuka
(ancient tomb mound)

古来河田の四つ塚の一つで、葉栗臣人麿(はぐりのおみひとまろ)(別名栗本人麿)の墓と伝えられる。7世紀後半頃、葉栗郡で郡司として善政を行い、光明寺(現存)を建立した。昭和8年(1933)県道工事のときに発見され、現在の地に塚が移築された。

(浅井町河田)

㉜有隣舎(ゆうりんしゃ)跡
Site of Yurinsha

鷲津幽林は若くして京都に出て勉学し、のち家(丹羽)に戻り安永年間の頃(1772～1781)近隣の人々に漢学を教授したのが漢学塾・萬松亭有隣舎のおこりである。 (丹羽)

ツインアーチ138 Twin Arch 138

A 138タワーパーク（国営木曽三川公園三派川地区センター）
138 Tower Park

平成７年（1995）４月に開園の大芝生広場を配した園内には、バラ大花壇「ローズストリーム」、大きな屋根やクライミングウォールがある「つどいの広場」等、いろいろな施設が設けられている。園内には様々な花木が栽植されており、四季折々の花にちなんだイベント「さくら祭り」、「スプリングフェスタ」、「サマーフェスタ」、「オータムフェスタ」等が盛大に行われ、多くの人で賑わう。また、木曽川の美しい流れをイメージした大小 2 本の双曲線アーチがそびえ立つ、高さ138 メートルの展望塔「ツインアーチ138」では、高さ100 メートルの展望室から、広大な濃尾平野、雄大な木曽川の流れや日本アルプスの峰々を一望することができる。

（光明寺）

ツインアーチのメリークリスマス
Twin Arch Christmas celebrations

ローズストリーム
Rose Stream

138タワーパーク内にあるバラ園「ローズストリーム」は、9品種約4,000株のバラが5月下旬と11月の2回、見事な花を咲かせる。

B 一宮市博物館
Ichinomiya City Museum

昭和62年（1987）11月に開館した一宮市博物館は、南北朝時代に創建の長嶋山妙興報恩禅寺の境内に建設、一宮の歴史と文化を雄弁に物語る遺産を一堂に展示してある。

（大和町妙興寺）

C 萬葉公園
Man'yo Park

“遠い日の萬葉のふるさとをしのんで散策してみませんか” 古くから萩原の地名があるこの地は萩の名所として万葉集に数多く歌われていると伝えられ、これにちなんで昭和32年（1957）に歌碑が建立され、萬葉公園と名づけられた。また、新しい元号「令和」を記念し、令和2年2月に歌板が建立された。（萩原町戸苅・築込・高松）

D 浅野公園
Asano Park

浅野家は源氏の流れで、代々浅野の地に住み浅野を姓とした。今から400年前、長政は叔父浅野長勝に養われ、この地で成長した。織田信長のお弓頭を勤めていた長勝には二人の娘があり姉（祢々）は豊臣秀吉に嫁し（北政所）、妹（弥々）は長政の妻となった。こうした由緒深い浅野長政の屋敷跡を、大正6年（1917）に昔ながらに復元したのが浅野公園である。また、同公園には珍木“ひとつばたご”（通称なんじゃもんじゃ）の大木や、祢々ゆかりの高台寺から寄贈されたホンキリシマツツジとシロヤブツバキがある。

（浅野）

尾州織物
Bishu Textile

日本のほぼ中央、愛知県北西部に位置する一宮市。「尾州」と呼ばれたこの土地を優雅に流れる木曽川は、肥沃な土地を生み出した。人々は自然の恵みを活かして綿花や桑を栽培し、それらを木綿や絹織物といった形にしてきた。

江戸中期に真清田神社の門前で始まった三八市に代表される「市（いち）」での織物の売買や行商を通じて、尾州には多くの情報が集まった。その情報をもとに磨かれた確かな技術により、一宮は縞木綿の一大産地として名を馳せた。

近代にはいち早く工業化に成功。豊富で良質な木曽川の水を利用し、毛織物工業は繁栄していく。糸が交わり、美しい布地が織られるように、水と人、人と人の交流が尾州織物を大きく発展させたのである。

尾州産地では、糸から生地になるまでの全ての工程を完結できることから、その連携の妙が織りなす多彩な表現力と高い品質が国内のみならず海外でも幅広く評価され、イギリスのハダースフィールド、イタリアのビエラと並び、世界三大毛織物産地と称されている。

一宮モーニング
Ichinomiya Morning

一宮の街で500店を数える喫茶店。朝の時間帯を中心にドリンク代のみでトーストや卵料理、サラダなどが付く「モーニングサービス」発祥の地として有名だ。

尾州織物の隆盛によりもたらされた「ガチャマン景気」（織機をガチャンと動かせば万の金が儲かる）に沸いた昭和30年代前半、繊維業者の打合せは織機の大きな音が鳴る工場を避けて静かな喫茶店で行われた。そこで人の良いマスターが、朝のサービスとして当時では貴重なゆで卵とピーナツを無料でコーヒーに付けたのが、一宮市のモーニングサービスの始まりである。

サービスは瞬く間に市内に広まり、半世紀以上たった今では定番のトーストやゆで卵だけでなく、店によっては味噌汁や茶わん蒸し、そば、お好み焼き、カレーなど趣向を凝らしたメニューが考案され、多くの人々を楽しませている。

「一宮モーニング」として愛され続けるこのサービスは、おもてなしの心にあふれる一宮の人々を象徴するひとつの「文化」としても広く知られている。

一宮市マスコットキャラクター **いちみん** Ichimin

「いちみん」は、清らかな水の流れと清々しい風が行き交う地域でよく見かける、幸せを運ぶ妖精です。人と触れ合うことが大好きなので、あちこち旅をして、多くの人と出会うことを楽しみにしています。どこかで見かけたら、声をかけてみてください。